

クレジット:

UTokyo Online Education 学術俯瞰講義 2016 谷口洋

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限ってページ単位で利用することができます。特に記載のない限り、本講義資料はページ単位でクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下に提供されています。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。

なお、本講義資料は、講義内で配布された資料から抜粋・再加工をしています。

「離騷」

屈原

帝高陽之苗裔兮

帝高陽の苗裔べうえい

朕皇考曰伯庸

朕が皇考を伯庸はくようと曰ふ

攝提貞孟陬兮

摂提せつてい孟陬まうすうに貞ただしく

惟庚寅吾以降

惟こ庚寅かういんに吾われ以て降くだれり

皇覽揆余于初度兮

皇覽ちちみて余われを初度はかに揆はかり

肇錫余以嘉名

肇はじめて余たまに錫かめいふに嘉名もつを以てす

名余曰正則兮

余を名づけて正則いと曰いひ

字余曰靈均

余あざなを字あざなして靈均と曰いふ

紛吾既有此内美兮

紛ふんとして吾われ既に此この内美なみ有り

又重之以脩能

又これ之に重しうぬるに脩能しうたいを以てす

扈江離與辟芷兮

江離へきしと辟芷かうむとを扈かうむり

紉秋蘭以爲佩

秋蘭つなを紉はいいで以て佩なと為す

汨余若將不及兮

汨いっとして余まさ將に及まじばざらんとするが若ごとくし

恐年歲之不吾與

年歲われの吾ともと与ともにせざるを恐る

朝搴阰之木蘭兮

朝あしたには阰をかの木蘭とを搴とり

夕攬洲之宿莽

夕ゆふべには洲すの宿莽しゆくぼうを攬とる

日月忽其不淹兮

日月こつは忽そとして其れ淹とどまらず

春與秋其代序

春と秋そと其れ代序そす

惟草木之零落兮

草木さうもくの零落おもを惟おもひ

恐美人之遲暮

美人の遲暮を恐る

不撫壯而棄穢兮

壯を撫ふして穢あいを棄あてず

何不改此度

何ぞ此この度どを改あらめざるや

乘騏驎以馳騁兮

騏驎ききに乘のりて以もつて馳騁ちていし

來吾道夫先路

來われれ吾夫かの先路みちを道みちびかん

昔三后之純粹兮

昔三后の純粹なる

固衆芳之所在

固まことに衆芳の在る所

雜申椒與菌桂兮

申椒しんせうと菌桂きんけいとを雜まじふ

豈維紉夫蕙芷

豈あにただかかの蕙芷けいしを紉つなぐのみならんや

彼堯舜之耿介兮

彼かの堯舜げうしゆんの耿介かうかいなる

既遵道而得路

既しかに道みちに遵したがひて路みちを得たり

何桀紂之猖披兮

何ぞ桀紂けつちうの猖披しやうひなる

夫唯捷徑以窘步

夫そ唯ただ捷徑せふけいを以きんて窘步きんぽせり

惟夫黨人之儉樂兮

惟ただ夫それ党人とうらくの儉樂けんらくする

路幽昧以險隘

路みち幽昧いうまいにして以けんて險隘あいなり

豈余身之憚殃兮

豈あに余が身こ之れ殃とがを憚はばからん

恐皇輿之敗績

皇輿くわうよの敗績はいせきを恐おそるるなり

忽奔走以先後兮

忽ち奔走して以て先後し

及前王之踵武

前王の踵武に及ばんとす

荃不察余之中情兮

荃余の中情を察せず

反信讒而齎怒

反つて讒を信じて齎怒す

余固知謇謇之爲患兮

余固より謇謇の患ひを為すを知るも

忍而不能舍也

忍んで舍むる能はざるなり

指九天以爲正兮

九天を指さして以て正と為す

夫唯靈脩之故也

夫れ唯靈脩の故なり

初既與余成言兮

初めに既に余と言を成ししも

後悔遁而有他

後に悔い遁れて他有り

余既不難夫離別兮

余既に夫の離別を難からず

傷靈脩之數化

靈脩の數化するを傷む

余既滋蘭之九畹兮

又樹蕙之百畝

畦留夷與揭車兮

雜杜衡與芳芷

冀枝葉之峻茂兮

願竣時乎吾將刈

雖萎絕其亦何傷兮

哀衆芳之蕪穢

衆皆競進以貪婪兮

憑不猷乎求索

羌內恕己以量人兮

各興心而嫉妬

忽馳驚以追逐兮

非余心之所急

老冉冉其將至兮

恐脩名之不立

余既に蘭を滋うることに之れ九畹こ りん

又蕙を樹うることに之れ百畝けい う こ ぼ

留夷と掲車とを畦にしりう い けつしや うね

杜衡と芳芷とを雜ふとかう はうし まじ

枝葉の峻茂せんことを冀ひしゆんも こひねが

願はくば時を竣つて吾將に刈らんとすわれまさ

萎絶すと雖も其れ亦何ぞ傷まんいへど そ また いた

衆芳の蕪穢するを哀しむぶ あい

衆皆競ひ進みて以て貪婪なりたんらん

憑つれども求索に猷かずみ あ

羌内に己れを恕して以て人を量りあ あ じよ はか

各心を興して嫉妬すおのおの

忽ち馳驚して以て追逐すれどもたちま ちぶ もつ

余が心の急とする所に非ずあら

老い冉冉として其れ將に至らんとすぜんぜん そ まさ

脩名の立たざるを恐るしうめい

朝飲木蘭之墜露兮

あした 朝に木蘭の墜露を飲み

夕餐秋菊之落英

ゆふべ 夕に秋菊の落英を餐らふ

苟余情其信姱以練要兮

いやく 苟も余が情其れ信に姱しく以て練要ならば

長顙領亦何傷

かんがん 長く顙領するも亦何ぞ傷まん

擘木根以結茝兮

もくこん と 木根を擘りて以て茝を結び

貫薜荔之落蕊

へいれい らくすゐ 薜荔の落蕊を貫く

矯菌桂以紉蕙兮

きんけい あ もつ 菌桂を矯げて以て蕙を紉ぎ

索胡繩之纚纚

こじよう なは 胡繩を索にして之れ纚纚たり

謇吾法夫前脩兮

あゐ か ぜんしう のつと 謇 吾夫の前脩に法る

非世俗之所服

世俗の服する所に非ず

雖不周於今之人兮

あ いへど 今の人に周はずと雖も

願依彭咸之遺則

はうかん 願はくば彭咸の遺則に依らん

長太息以掩涕兮

長太息して以て涕を掩ひ

哀民生之多艱

民生の多艱なるを哀しむ

余雖好脩姱以鞿羈兮

余好んで脩姱して以て鞿羈すと雖も

謇朝諝而夕替

謇朝に諝げて夕に替てらる

既替余以蕙纒兮

既に余を替つるに蕙纒を以てし

又申之以攬茝

又之を申ぬるに茝を攬るを以てす

亦余心之所善兮

亦余が心の善しとする所

雖九死其猶未悔

九死すと雖も其れ猶未だ悔いず

怨靈脩之浩蕩兮

怨むらくは靈脩の浩蕩として

終不察夫民心

終に夫の民心を察せざるを

衆女嫉余之蛾眉兮

衆女 余の蛾眉を嫉みて

謠諑謂余以善淫

謠諑して余を謂ふに善く淫するを以てす

固時俗之工巧兮

固に時俗の工巧なる

偃規矩而改錯

規矩に偃きて改め錯き

背繩墨以追曲兮

繩墨に背きて以て曲を追ひ

競周容以爲度

周容を競ひて以て度と為す

忼鬱邑余侘傺兮

吾獨窮困乎此時也

寧溘死以流亡兮

余不忍爲此態也

鸞鳥之不羣兮

自前世而固然

何方圜之能周兮

夫孰異道而相安

屈心而抑志兮

忍尤而攘詬

伏清白以死直兮

固前聖之所厚

忼^{とん}として鬱^{うつ}邑^{いふ}として余侘^た傺^{たい}し

吾^{われ}独^こり此^この時に窮困するなり

寧^{むし}ろ溘^{かふ}死^しして以^{もつ}て流亡すとも

余^こ此^この態を為^なすに忍びざるなり

鸞^し鳥^{てう}の群せざるは

前世自^よりして固^{もと}より然^{しか}り

何^はぞ方^{ほう}圜^{ゑん}は之^これ能^よく周^あはん

夫^{たれ}孰^たか道^{みち}を異^いにして相安^{やす}んぜん

心を屈して志を抑へ

尤^{とが}めを忍^はんで詬^{はら}を攘^{はら}ひ

清^き白^{はく}に伏^{もつ}して以^{もつ}て直^ちに死^しするは

固^{まこと}に前^{まへ}聖^{せい}の厚^{あつ}くする所なり

悔相道之不察兮
延佇乎吾將反
回朕車以復路兮
及行迷之未遠
步余馬於蘭皋兮
馳椒丘且焉止息
進不入以離尤兮
退將復脩吾初服
製芰荷以爲衣兮
集芙蓉以爲裳
不吾知其亦已兮
苟余情其信芳
高余冠之岌岌兮
長余佩之陸離
芳與澤其雜糅兮
唯昭質其猶未虧
忽反顧以遊目兮
將往觀乎四荒
佩繽紛其繁飾兮
芳菲菲其彌章
民生各有所樂兮
余獨好脩以爲常
雖體解吾猶未變兮
豈余心之可懲

道を相るの察かならざるを悔い
延佇して吾將に反らんとす
朕が車を回らして以て路を復り
行迷ふこと未だ遠からざるに及ばん
余が馬を蘭皋に歩ませ
椒丘に馳せて且く焉に止息す
進んで入れられずして以て尤めに離ひ
退いて將に復吾が初服を脩めんとす
芰荷を製して以て衣と爲し
芙蓉を集めて以て裳と爲す
吾を知らざるも其れ亦已まん
苟に余が情其れ信に芳し
高く余が冠は之れ岌岌たり
長く余が佩は之れ陸離たり
芳と沢と其れ雜糅すれど
唯昭質は其れ猶未だ虧けず
忽ち反顧して以て目を遊ばしめ
將に往きて四荒を觀んとす
佩は繽紛として其れ繁く飾り
芳は菲菲として其れ弥章かなり
民生各樂しむ所有り
余独り脩を好んで以て常と爲す
体解すと雖も吾猶未だ變ぜず
豈余が心は之れ懲るべけんや

女嬃之嬋媛兮

ぢよしゆ せんゑん
女嬃の嬋媛たる

申申其詈予

しんしん
申申として其れ予を詈る

曰鮫婞直以亡身兮

いは こん けいちよく
曰く 鮫は婞直にして以て身を亡ぼし

終然歿乎羽之野

う えう
終然として羽の野に歿せり

汝何博謩而好脩兮

なんぢ はくけん しう
汝は何ぞ博謩にして脩を好み

紛獨有此婞節

こ くわせつ
紛として独り此の婞節有る

薺菴施以盈室兮

しりよくし み
薺菴施を以て室を盈たすに

判獨離而不服

判として独り離れて服せず

衆不可戸說兮

衆は戸ごとに説くべからず

孰云察余之中情

たれ こと
孰か云に余の中情を察せん

世並舉而好朋兮

世は並び挙げて朋を好むに

夫何瑩獨而不予聽

そ けいどく
夫れ何ぞ瑩独にして予に聴かざると

依前聖以節中兮

前聖に依りて以て節中せんと

喟憑心而歷茲

喟き心に憑ちて茲を歴

濟沅湘以南征兮

沅湘を濟りて以て南征し

就重華而陳詞

重華に就いて詞を陳ぶ

啓九辯與九歌兮

啓は九弁と九歌とをもつてし

夏康娛以自縱

夏は康娛して以て自ら縱にす

不顧難以圖後兮

難きを顧みて以て後を圖らず

五子用失乎家巷

五子用つて家巷を失ふ

羿淫遊以佚畋兮

羿は淫遊して以て佚畋し

又好射夫封狐

又好んで夫の封狐を射る

固亂流其鮮終兮

固に乱流は其れ終はること鮮し

浞又貪夫厥家

浞は又夫の厥の家を貪る

澆身被服強圉兮

澆は身に強圉を被服し

縱欲而不忍

欲を縱にして忍ばず

日康娛而自忘兮

日に康娛して自ら忘れ

厥首用夫顛隕

厥の首用つて夫れ顛隕せり

夏桀之常違兮
乃遂焉而逢殃
后辛之菹醢兮
殷宗用而不長
湯禹儼而祇敬兮
周論道而莫差
舉賢而授能兮
循繩墨而不頗
皇天無私阿兮
覽民德焉錯輔
夫維聖哲之茂行兮
苟得用此下土
瞻前而顧後兮
相觀民之計極
夫孰非義而可用兮
孰非善而可服
阼余身而危死兮
覽余初其猶未悔
不量鑿而正柄兮
固前脩以菹醢
曾歔歔余鬱邑兮
哀朕時之不當
攬茹蕙以掩涕兮
霑余襟之浪浪

夏桀の常に違へる
乃ち遂に焉にして殃に逢へり
后辛の菹醢にする
殷宗用つて長からず
湯禹は儼にして祇敬し
周は道を論じて差つこと莫し
賢を挙げて能に授け
繩墨に循ひて頗ならず
皇天は私阿無く
民徳を覽て焉に輔けを錯く
夫れ維聖哲は之れ茂行あり
苟に此の下土を用ふるを得
前を瞻て後ろを顧み
民の計極を相觀す
夫れ孰か義に非ずして用ふべけん
孰か善に非ずして服すべけん
余が身を阼ふくして死に危づくも
余が初めを覽て其れ猶未だ悔いず
鑿を量らずして柄を正せば
固に前脩以て菹醢にせらる
曾ねて歔歔して余鬱邑し
朕が時の当らざるを哀しむ
茹蕙を攬りて以て涕を掩へど
余が襟を霑して之れ浪浪たり

跪敷衽以陳辭兮
耿吾既得此中正
馳玉虬以乘鸞兮
溘埃風余上征
朝發軔於蒼梧兮
夕余至乎縣圃
欲少留此靈瑣兮
日忽忽其將暮
吾令羲和弭節兮
望崦嵫而勿迫
路曼曼其脩遠兮
吾將上下而求索
飲余馬於咸池兮
總余轡乎扶桑
折若木以拂日兮
聊逍遙以相羊

ひざまづ ぎき衽を敷きて以て辞を陳べ
あきら 耿かに吾既に此の中正を得たり
ぎよくきう 玉虬を馳として以て鸞に乘り
たちま 溘ち埃風ありて余上り征く
あした 朝に軔を蒼梧に発し
ゆふべ 夕に余県圃に至る
しばら 少く此の靈瑣に留まらんと欲すれば
こつこつ 日は忽忽として其れ將に暮れんとす
われぎくわ 吾羲和をして節を弭めて
えんじ 崦嵫を望んで迫る勿からしむ
みち まんまん 路は曼曼として其れ脩遠なり
われまさ 吾將に上下して求索せんとす
かんち 余が馬を咸池に飲ひ
たつな 余が轡を扶桑に総び
じやくほく 若木を折りて以て日を払ひ
しばら 聊く逍遙して以て相羊す

前望舒使先驅兮

望舒ぼうじよを前まへにして先驅せんきよせしめ

後飛廉使奔屬

飛廉ひれんを後のちろにして奔屬ほんぞくせしむ

鸞皇爲余先戒兮

鸞皇らんわう余われが爲ために先戒せんかいし

雷師告余以未具

雷師らいし余われに告つぐるに未いまだ具そなはらざるを以もつてす

吾令鳳鳥飛騰兮

吾われ令ほうてう鳳鳥ほうてうをして飛騰ひてんせしめ

繼之以日夜

之これを繼つぐに日夜にちやを以もつてす

飄風屯其相離兮

飄風へうふう屯あつまりて其それ相離さうりれ

帥雲霓而來御

雲霓うんげいを帥ひきゐて来むかり御むかふ

紛總總其離合兮

紛そとして總そ總そとして其それ離合りごうし

斑陸離其上下

斑はんとして陸離りくとして其それ上下じやうげす

吾令帝閭開關兮

吾われ令てい帝閭ていをして関かんを開ひらかしめんとすれば

倚閭闔而望予

閭闔しやうかふに倚よりて予われを望のぞむ

時曖曖其將罷兮

時とき曖あい曖あいとして其それ將まさに罷きはまらんとす

結幽蘭而延佇

幽蘭いうらんを結むすんで延佇えんちよす

世溷濁而不分兮

世よ溷濁こんだくして分わかかれず

好蔽美而嫉妬

好おほんで美みを蔽おほひて嫉妬しどす

朝吾將濟於白水兮

朝あしたに吾將われまさに白水わたを濟わたり

登聞風於縹馬

聞風らうふうに登りて馬つなを縹つながんとす

忽反顧以流涕兮

忽たちまち反顧もつして以もつて流涕りうていし

哀高丘之無女

高丘ちやうの女を無なきを哀かなしむ

溘吾遊此春宮兮

溘たちまち吾われこ此の春宮はるきうに遊あそび

折瓊枝以繼佩

瓊枝けいしを折もつりて以はいて佩はいを繼つづぐ

及榮華之未落兮

榮華いまの未いまだ落おちちざるに及およんで

相下女之可詒

下女かぢよの詒おくるべきを相みん

吾令豐隆乘雲兮

吾われ令し豐隆ほうりゅうをして雲のに乘のり

求宓妃之所在

宓妃ふくひの所在ふくひを求もとめしむ

解佩纓以結言兮

佩纓はいじやうを解もついて以もつて言ことを結むすぶ

吾令蹇脩以爲理

吾われ令し蹇脩けんしうをして以もつて理ことを為なさしむ

紛總總其離合兮

紛總ふんそう總そうとして其それ離合りくわうし

忽緯繡其難遷

忽たちまち緯繡きくわくして其それ遷うつり難がたし

夕歸次於窮石兮

夕ゆふべに歸かへりて窮石きゆうせきに次やどり

朝濯髮乎洧盤

朝あしたに髮かみを洧盤ゐばんに濯あらふ

保厥美以驕傲兮

厥その美うつくしさを保もつみて以もつて驕傲けうがうし

日康娛以淫遊

日ひびに康娛かうぐして以もつて淫遊いんいうす

雖信美而無禮兮

信まことに美うつくなりと雖いへども而しかも礼無れいし

來違棄而改求

来きれ違棄いへどして改あらめ求もとめん

覽相觀於四極兮

覽^みて四極を相觀し

周流乎天余乃下

天に周流して余乃^{すなは}ち下る

望瑤臺之偃蹇兮

瑤^{えうだい}台の偃蹇^{えんけん}たるを望み

見有娥之佚女

有^{いうじゆう}娥^いの佚女^{いつちよ}を見る

吾令鳩爲媒兮

吾^{われちん}鳩^んをして媒^{ばい}を為^なさしむるに

鳩告余以不好

鳩^{ちん}余^んに告ぐるに好^よからざるを以^{もつ}てす

雄鳩之鳴逝兮

雄^{ゆうきう}鳩^うの鳴^うき逝^ゆくすら

余猶惡其佻巧

余^{なほ}猶^そ其^{てうかう}の佻^{にく}巧^くを惡む

心猶豫而狐疑兮

心猶^{こぎ}予^ぎして狐疑^きし

欲自適而不可

自^ゆら適^ゆかんと欲するも不可なり

鳳皇既受詒兮

鳳^{ほうわう}凰^うは既^{おくりもの}に詒^ぎを受くるも

恐高辛之先我

高辛の我に先んぜんことを恐る

欲遠集而無所止兮

聊浮遊以逍遙

及少康之未家兮

留有虞之二姚

理弱而媒拙兮

恐導言之不固

世溷濁而嫉賢兮

好蔽美而稱惡

閨中既以邃遠兮

哲王又不寤

懷朕情而不發兮

余焉能忍與此終古

索蘼茅以筵筭兮

命靈氛爲余占之

曰兩美其必合兮

孰信脩莫念之

思九州之博大兮

豈唯是其有女

曰勉遠逝而無狐疑兮

孰求美而釋女

何所獨無芳草兮

爾何懷乎故宇

遠集せんと欲して止まる所無し

聊く浮遊して以て逍遙せん

少康の未だ家せざるに及んで

有虞の二姚を留めんにも

理弱くして媒拙なれば

導言の固からざるを恐る

世溷濁して賢を嫉み

好んで美を蔽ひて悪を称ぐ

閨中既に以て邃遠なり

哲王又寤らず

朕が情を懷いて発せず

余焉くんぞ能く此と終古するに忍びん

蘼茅を索りて以て筵筭し

靈氛に命じて余が爲に之を占はしむ

曰く兩美は其れ必ず合はん

孰か信に脩くして之を念ふこと莫からんや

思ふに九州の博大なる

豈唯是にのみ其れ女有らんやと

曰く勉めて遠逝して狐疑する無かれ

孰か美を求めて女を釈てん

何れの所にか独り芳草無からん

爾何ぞ故宇を懷ふ

世幽昧以眩曜兮
孰云察余之善惡
民好惡其不同兮
惟此黨人其獨異
戶服艾以盈要兮
謂幽蘭其不可佩
覽察草木其猶未得兮
豈理美之能當
蘇糞壤以充幃兮
謂申椒其不芳

世は幽昧にして以て眩曜す
孰か云に余の善惡を察せん
民の好惡は其れ同じからず
惟此の党人のみ其れ独り異なり
戸ごとに艾を服して以て要に盈て
幽蘭は其れ佩ぶべからずと謂ふ
草木を覽察するすら其れ猶未だ得ず
豈理の美に之れ能く当たらんや
糞壤を蘇りて以て幃に充て
申椒は其れ芳しからずと謂ふ

欲從靈氛之吉占兮

心猶豫而狐疑

巫咸將夕降兮

懷椒糈而要之

百神翳其備降兮

九疑繽其並迎

皇剡剡其揚靈兮

告余以吉故

曰勉陞降以上下兮

求槩籒之所同

湯禹嚴而求合兮

摯咎繇而能調

苟中情其好脩兮

又何必用夫行媒

說操築於傅巖兮

武丁用而不疑

呂望之鼓刀兮

遭周文而得舉

甯戚之謳歌兮

齊桓聞以該輔

及年歲之未晏兮

時亦猶其未央

恐鵜鴂之先鳴兮

使夫百草爲之不芳

靈氛の吉占に従はんと欲すれども

心猶豫して狐疑す

巫咸將に夕に降らんとす

椒糈を懷きて之を要ふ

百神翳ひて其れ備に降り

九疑繽として其れ並び迎ふ

皇は剡剡として其れ靈を揚げ

余に告ぐるに吉の故を以てす

曰く勉めて陞降して以て上下し

槩籒の同じき所を求めよ

湯禹は嚴にして合ふを求め

摯と咎繇とは而ち能く調ふ

苟も中情其れ脩を好まば

又何ぞ必ずしも夫の行媒を用ひん

説は築を傅巖に操れども

武丁用ひて疑はず

呂望の刀を鼓する

周文に遭ひて挙げらるるを得たり

甯戚の謳歌する

齊桓聞いて以て輔に該へたり

年歳の未だ晏からず

時も亦猶其れ未だ央きざるに及ばん

恐らくは鵜鴂の先づ鳴きて

夫の百草をして之が爲に芳しからざらしめんことをと

何瓊佩之偃蹇兮

何ぞ瓊佩けいはいの偃蹇えんけんたる

衆蓐然而蔽之

衆蓐然あいぜんとして之これを蔽おほふ

惟此黨人之不諒兮

惟此ただこの党人たうじんの諒まことならざる

恐嫉妬而折之

恐らくは嫉妬くじして之これを折くじかん

時繽紛其變易兮

時は繽紛ひんぶんとして其それ變易へんえきす

又何可以淹留

又何もつぞ以えんりうて淹留えんりうすべけん

蘭芷變而不芳兮

蘭芷らんしは變らんしじて芳らんししからず

荃蕙化而爲茅

荃蕙せんけいは化せんけいして茅ぼうと為なる

何昔日之芳草兮

何ぞ昔日この芳草せうがい

今直爲此蕭艾也

今直こちに此せうがいの蕭艾なと為なるや

豈其有他故兮

豈あにそ其それ他あにその故有あにそらんや

莫好脩之害也

脩しうを好しうむこと莫なきの害ななり

余以蘭爲可恃兮

羌無實而容長

委厥美以從俗兮

苟得列乎衆芳

椒專佞以慢慝兮

澥又欲充夫佩幃

既干進而務入兮

又何芳之能祗

固時俗之流從兮

又孰能無變化

覽椒蘭其若茲兮

又況揭車與江離

惟茲佩之可貴兮

委厥美而歷茲

芳菲菲而難虧兮

芬至今猶未沫

和調度以自娛兮

聊浮游而求女

及余飾之方壯兮

周流觀乎上下

余蘭を以て恃むべしと為せり

羌実無くして容長ず

厥の美を委てて以て俗に従ひ

苟も衆芳に列するを得たり

椒は専ら佞にして以て慢慝たり

澥は又夫の佩幃を充たさんと欲す

既に進むを干めて入れられんことを務むれば

又何の芳をか之れ能く祗まん

固より時俗の流れに従ふ

又孰か能く変化すること無からん

椒蘭を覽るに其れ茲の若し

又況や揭車と江離とをや

惟茲の佩の貴ぶべき

厥の美を委てて茲に歷るも

芳は菲菲として虧け難く

芬は今に至るも猶未だ沫まず

調度を和らげて以て自ら娛しみ

聊く浮游して女を求めん

余が飾りの方に壯んなるに及んで

周流して上下を觀ん

靈氛既告余以吉占兮

靈氛れいふん既に余に告ぐるに吉占もつを以てす

歷吉日乎吾將行

吉日えらを歴えらんで吾將われまさに行かんとす

折瓊枝以爲羞兮

瓊枝けいしを折もつりて以て羞なと為し

精瓊靡以爲粦

瓊靡けいびを精しちげて以て粦ちやうと為す

爲余駕飛龍兮

余が為ために飛龍がを駕し

雜瑤象以爲車

瑤象えうざうを雜まじへて以て車もつと為す

何離心之可同兮

何ぞ離心の同じかるべき

吾將遠逝以自疏

吾將われまさに遠逝もつして以て自とほざら疏けんとす

邐吾道夫崑崙兮

邐めぐつて吾夫われかの崑崙こんろんに道すれば

路脩遠以周流

路脩遠みちしうゑんにして以て周流もつす

揚雲霓之晻藹兮

雲霓うんげいの晻藹あんあいたるを揚げ

鳴玉鸞之啾啾

玉鸞ぎよくらんの啾啾しうしうたるを鳴らす

朝發軔於天津兮

朝あしたに軔じんを天津てんじんに発はし

夕余至乎西極

夕ゆふべに余せい西極きよくに至いたる

鳳皇翼其承旂兮

鳳皇ほうわうは翼つしんで其それ旂きを承ささげ

高翱翔之翼翼

高たかく翱翔かうしやうして之これ翼翼よくよくたり

忽吾行此流沙兮

忽たちまち吾われ此この流沙りゅうさに行いき

遵赤水而容與

赤しや水すいに遵したがひて容よう与よす

麾蛟龍使梁津兮

蛟龍かうりゆうを麾さしまねいて津しんに梁はしかけしめ

詔西皇使涉予

西皇せいわうに詔つげて予よを涉わたさしむ

路脩遠以多艱兮

路みち脩遠しうゑんにして以もつて艱なやみ多おほし

騰衆車使徑待

衆車しゆしやを騰はせて徑けい待たいせしむ

路不周以左轉兮

路みち不ふ周しう以もつて左さ轉てんし

指西海以爲期

西海せいかいを指さして以もつて期きと為なす

屯余車其千乘兮

余あつが車しやを屯あつむること其それ千乘せんじやう

齊玉軛而並馳

玉軛ぎよくたいを齊ととのへて並はび馳はす

駕八龍之婉婉兮

八龍はつりゆうの婉婉ゑんゑんたるを駕がして

載雲旗之委蛇

雲旗うんきの委蛇ゐいたるを載たつ

抑志而弭節兮

志を抑へて節を弭^{とど}め

神高馳之邈邈

神高く馳^はせて之れ邈^こ邈^{はく}たり

奏九歌而舞韶兮

九歌を奏^{せう}して韶^{せう}を舞^まひ

聊假日以媮樂

聊^{しばら}く日を仮^かりて以て媮^ゆ樂^{らく}す

陟陞皇之赫戲兮

皇の赫^{かく}戲^ぎたるに陟^{ちよく}陞^{しやう}し

忽臨睨夫舊鄉

忽^{たちま}ち夫^かの旧郷^{きんけい}を臨^{りん}睨^{げい}す

僕夫悲余馬懷兮

僕^お夫^も悲^{かな}しみ余^おが馬^ば懷^{おも}ひ

蜷局顧而不行

蜷^{けん}局^{きよく}として顧^{かん}みて行^ゆかず

亂曰

乱^{いは}に曰^{いは}く

已矣哉

已^やんぬるかな

國無人莫我知兮

国^{くに}に人^{ひと}無^なく我^{われ}を知^しる莫^なし

又何懷乎故都

又何^{いか}ぞ故都^{こと}を懷^{おも}はん

既莫足與爲美政兮

既^{すで}に与^{とも}に美政^{みせい}を為^なすに足^たる莫^なし

吾將從彭咸之所居

吾^{われ}將^{まさ}に彭咸^{ほうかん}の居^をる所に從^{したが}はんとす